

# 凶讖と北魏の廢仏について

——李弘と劉潔・蓋呉の凶讖禍——

春 本 秀 雄

はじめに

安居香山先生の論文「漢魏六朝時代に於ける凶讖と仏教——特に僧伝を中心として——」（安居香山・中村璋八著『緯書の基礎的研究』国書刊行会 一九七六年〈昭和五十一〉の二五九頁に、

さて仏教は、この様に凶讖が大いに流行していた漢魏晋前後にかけて伝来し、流布して行つた。故に必然そこに、<sup>(1)</sup>兩者の触れ合うところ、相互に摩擦なり、交流なりがあつたであらう。

とある。更に、同論文の二六一頁に、太平真君五年（四四四）正月の廢仏と凶讖禁絶についての『魏書』卷四下、世祖紀第四下の、

戊申、詔曰。愚民無識、信惑妖邪、私養師巫、挾藏讖記、陰陽、凶緯、方伎之書、又沙門之徒、假西戎虚誕、生致妖孽。非所以壹齊政化、布淳徳於天下也。（戊申、詔して曰はく。愚民、識無く、妖邪を信惑し、私に師巫を養い、讖記、陰陽、凶緯、方伎之書を挾藏し、又、沙門之徒、西戎の虚誕を仮にして、妖孽（凶悪の萌兆）を生致す。政化を壹齊にし、淳徳を天下に布く所以に非ざる也。）

を引用して、師巫、讖記、陰陽、凶緯、方伎之書、沙門を同時に、廢絶、禁絶したことを指摘している。<sup>(2)</sup> 筆者は、北魏の太武帝（四〇八〜四五二）が、何故、凶讖を禁絶したのか、何故、廢仏をしたのか、また、何故、凶讖の禁絶と廢仏とが同時に行なわれたのかを明確にしたいと考えて論考を重ねてきた。<sup>(3)</sup> 先の拙稿に「北魏廢仏の説について―蓋吳と凶讖と僧侶の關係―」（『小此木輝之先生古稀記念論文集 歴史と文化』 青史出版 二〇一六年（平成二十八））がある。これでは北魏廢仏の時の蓋吳（四一七〜四四六）と凶讖と僧侶の關係について論じた。本拙稿においては、大所高所からの凶讖の流行と禁絶の歴史、凶讖と謠言との關係について、北魏の廢仏の時の北魏社会における凶讖流行の様相として、真君李弘（？〜三七〇）の凶讖を後ろ盾とした反乱について、また、劉潔（生没年不詳）の反乱と凶讖禁絶との關係、更には、北魏の廢仏と凶讖禁絶の主な原因となる蓋吳の反乱についても考え合わせて、凶讖について、主には、北魏廢仏の時における凶讖はどのようなものであったのか、その様相を本拙稿において明確にしてみたいと考えている。<sup>(4)</sup>

## 第一節 凶讖の流行と禁絶の歴史

先ずは、概括的に凶讖の流行と禁絶の歴史について述べてみたい。

凶讖については、讖、讖緯、經緯、凶緯、凶録、緯候、凶候、秘經、符命、等を同類のものとして統括した称谓である緯書が、前漢中、末期より後漢にかけて流行した。<sup>(5)</sup> 後漢光武帝（二五〜五七在位）が、李通（二六八〜二〇九）、蔡少公（生没年不詳）、万修（？〜二六）、彊華（生没年不詳）等の奉った凶讖により意を決して挙兵し、新の王莽（九〜二三在位）を打倒して劉漢王朝を再興した。<sup>(6)</sup> 更に、薛漢（生没年未詳）に詔して凶讖を校訂させたり、五六

年（中元元）には光武帝自ら凶讖を天下に宣布した。<sup>(7)</sup> また、光武帝の次の明帝（五七〜七五在位）の五八年（永平二）

には樊儵（生没年不詳）が讖記によつて五経の異説を正した。<sup>(15)</sup> このように、後漢の初期においては、凶讖が世に行われて、為政者にとつては凶讖に通じることが人々を治めるのに重要な政策課題となつており、内学と外学とに分ければ、緯書、凶讖は内学と称され、<sup>(14)</sup> 更には、古来の儒教の經典である五経を凶讖と同類の讖記をもつて正した程<sup>(15)</sup> であつた。しかしながら、

- (1) 西晋、武帝、二六七年〈泰始三〉<sup>(16)</sup>
- (2) 後趙、石虎（三三四〜三四七）<sup>(17)</sup>
- (3) 前秦、苻堅（三五七〜三八五）<sup>(18)</sup>
- (4) 北魏、太武帝、四三八年〈太延四〉・四四四年〈太平真君五〉・四四六年〈太平真君七〉<sup>(19)</sup>
- (5) 宋、孝武帝、大明（四五七〜四六四）中<sup>(20)</sup>
- (6) 北魏、孝文帝、四八五年〈太和九〉<sup>(21)</sup>
- (7) 齊、武帝、四八五年〈永明三〉<sup>(22)</sup>
- (8) 梁、武帝、天監（五〇二〜五一九）<sup>(23)</sup>
- (9) 隋、文帝、五九三年〈開皇十三〉<sup>(24)</sup>
- (10) 隋、煬帝（六〇五〜六一六在位）<sup>(25)</sup>

と凶讖は禁圧、禁絶された。<sup>(26)</sup> 以上のように、前漢中末期より後漢にかけて、凶讖、緯書は成立し、後に、六朝、隋の時代に禁絶された。<sup>(27)</sup>

因みに、北魏の廢仏と凶讖の禁絶に至るまでには次のような歴史が展開した。後漢末靈帝（一六八〜一八九在位）の時に、張角（？〜一九二）、袁紹（一五四以前〜二〇二）、曹操（一五五〜二一〇）、劉備（二六一〜二三二）、孫權（二二二〜二五二）、等により政権争いが激化し、三国鼎立期を迎えた。魏、呉、蜀、三国のうち魏が蜀を併合し、呉を倒して統一し、西晋となり、その後、八王の乱（二九一〜三〇六）により、西晋は滅び、北中国は非漢系の五胡（匈奴、

羯、鮮卑、氐、羌)による十六国(匈奴―前趙(漢)(三〇四―三二九)、北涼(三九七―四三九)、夏(大夏)(四〇七―四三一)、羯―後趙(三一九―三五二)、鮮卑―前燕(三三七―三七〇)、後燕(三八四―四〇九)、西秦(三八五―四三一)、南涼(三九七―四一四)、南燕(三九八―四一〇)、氐―成(大成・漢)(三〇四―三四七)、前秦(三五二―三九四)、後涼(三八六―四〇三)、羌―後秦(三八四―四一七)、(漢族)―前涼(三〇一―三七六)、西涼(四〇〇―四二二)、北燕(四〇九―四三九)の短期政権が興亡した。この五胡十六国の興亡に終止符を打ったのが鮮卑族拓跋部の北魏であった。三八六年(登国元)に平城に都し、北魏三代皇帝の太武帝の時の四三一年(元嘉八)に赫連氏の夏を、四三六年(太延二)には漢人馮跋(四〇九―四三〇在位)の北燕を、四三九年(太延五)に沮渠氏の北涼を滅ぼして北魏の太武帝は北中国を統一した。更に、北魏太武帝は、四三八年(太延四)、四四四年(太平真君五)、四四六年(太平真君七)に廢仏と凶讖禁絶を行った。これは太武帝が北中国を統一、統治していく中で必然として挙行しなければならなかった政策課題であった。<sup>28)</sup> 更には、北魏においては、孝文帝(四七一―四九九在位)の時の四八五年(太和九)に、凶讖の類を焚焼して禁絶をもした。<sup>29)</sup> 太武帝の凶讖禁絶の後の北魏の孝文帝の時にも凶讖の類は焚焼・禁絶を受けている歴史的事実がある。

## 第二節 凶讖と謠言について

次に、凶讖と謠言について述べてみたい。

凶讖については、『後漢書』光武帝紀に次のようにある。「宛人李通等以凶讖説光武云。劉氏復興、李氏為輔。(宛人李通等、凶讖を以て光武に説ひて云ふ。劉氏、復たび興こり、李氏、輔と為らん。)」とある。これの李賢注に、「凶、河凶也。讖、符命之書、讖、驗也。言為王者受命之徵驗也。(凶は、河凶なり。讖は、符命の書、讖は、驗なり。言

ふところは、王者、受命を為すの徴驗なり。」とある。つまり、凶讖とは、「河凶、符命之書、のことであり、王者が受命を為すところの徴驗、しるしである。」であり、従って、天命とのかかわりを持つしるしである。謠言については、『後漢書』劉陶伝に次のようにある。「詔公卿以謠言、举刺史二千石為蠹害者。（詔するに、公卿、謠言を以て、刺史二千石、蠹害を為す者を挙げ。）」とある。これの李賢注に、「謂聽百姓風謠善惡而黜陟之也。（百姓、風謠の善惡を聴きて、これを黜陟なりを謂ふ。）」とある。つまり、謠言とは、「百姓の風謠善惡」であり、一般人民の善惡の声のことである。このように凶讖は天命との関わりがあり、謠言は一般の人々の声のことである。

先行研究に、串田久治著『中国古代の「謠」と「予言」』（創文社 一九九九年（平成十一））がある。同書の二一四頁に次のようにある。

中元元年（五六）、光武帝が圖讖を宣布してより緯書に翻弄された後漢王朝、永元九年（九七）、張衡が圖讖の禁絶を上奏したころ、「童謠」に込められた「予言」の政治・社会批判は、まさに権力機構にとつては反逆的行為であった。しかし、災異から将来を予測することを戒めた災異説が讖緯説に取って代われ、天の神秘性を傘に体制擁護のための託宣へと変貌したように、「予言」を謳った「謠」も次第に神託へと変容していった。しかしながら、「謠」が讖緯説と決定的に違うのは、「謠」の本来の性質——自然に人口に膾炙して憂いや恨みを共有する人々の間に伝授するものであつて、権力機構はそれを禁止することができないだけでなく、自らの正当性を作為的に「謠」にして流行させようとしても不可能であつた点にある。それ故、「謠」は以後も知識人の政治・社会批判の武器として滅びることはなかった。

泰始三年（二六七）、晋の武帝が星辰讖緯の学を禁止したのをはじめ、後趙の石虎・前秦の符堅らも星讖・圖讖の学を禁止している。占星の学や圖讖の学は禁圧できても「謠」は禁圧できない。なぜなら、「謠」は文字ではなく、謳った時点で消滅する口頭言語で流布するからである。口頭言語で人から人へと謳い継いでいく「謠」は、その責任を追及できないために、より一層研ぎ澄まされたメスで権力機構を切りつけて衝撃を与えることができ

る。そして、ひとたび「謠」が権力の横暴を糾弾する手段として定着し、権力機構にとつて忌むべきものとして認識された時、「童謠」は熒惑の使者による神秘化や権威づけを必要としなくなった。

とある。ここに、「災異から将来を予測することを戒めた災異説が讖緯説に取つて代わられ、天の神秘性を傘に体制擁護のための託宣へと変貌したように、予言を謳つた謠も次第に神託へと変容していった。」とある。

更に、小柳司氣太「童謠・圖讖・教匪」(『東洋思想の研究』一九四二年〈昭和十七〉森川書店)の四一八頁に、さて、一たび「讖緯」を利用して、其の目的を成就してからは、後の帝王又は帝王ならんとする野心家は多く之に倣ひ、後漢の光武皇帝の如き英明な君主すら、之を信用す。後漢の末頃から、道教の発達と共に、魏晉六朝を経て、各種の迷信「謠言」、盛んに見はれた。(中略)「童謠」又「図讖」の流行は、中国歴史から見れば、乱亡の兆候である。社会の人心が不安なることから、いろいろの流言飛語が行はると同様なわけである。

とある。更に、同書、四一六頁に、

是に於てか、好事家の類ありて、此種の事を捏造し、又は野心家乃至奸雄亂を作すの輩は、之を利用して「自己がかくなす事は、恰も天命である、聴け、「童謠」にもかく歌ふて居るではないか、古人の歌でも、かく述べてをるではないか」といふ風に民心を煽動して、自己の勢力を隠々の中に張らんとする。(中略)かの「図讖」又は「讖緯」と称する類も、此の一種である。

とある。このように、讖緯・図讖・童謠・謠言は天命、天神の託宣・託言としての予言であり、現社会体制への批判、変革を標榜するものである。<sup>(1)</sup>

また、前出の安居香山先生の論文の二五八頁に、

所で、史書に図讖・図緯・河図・緯・図録・讖緯等々と、異称されているこれらは、既に陳槃教授が、夫讖緯諸篇、其稱謂如是無拘、而其性質、復如是名異實同。

と論考されている如く、同類のものゝ異称に過ぎない。(中略)図讖が、漢より魏晉にかけて多く流行した。(中略)

この考察に於いて、敢えて図讖と云う所以も、又ここにあるのである。(中略)さて仏教は、この様に図讖が大いに流行していた漢魏晋前後にかけて伝来し、流布して行つた。故に必然そこに、両者の触れ合うところ、相互に摩擦なり、交流なりがあつたであらう。

とある。安居香山先生は台湾の陳槃教授の「讖緯命名及其相關之諸問題」(圖・候・符・書録之稱謂)、「幼獅學報」第一卷、第一期(一九五八年)を引用して、図讖・図緯・河図・緯・図録・讖緯等々と、異称されているものは、名異實同として「同類のもの異称に過ぎない。」とし、「図讖が、漢より魏晋にかけて多く流行した。」として、同書二五九頁に、「この考察(漢魏六朝時代に於ける図讖と仏教——特に僧伝を中心として——)に於いて、敢えて図讖と云う」としている。

因みに、向燕南「北魏太武帝灭佛原因考辨」(《北京师范大学学报(社会科学版)》一九九四年第二期)の五九頁に、「灭虜吳也」的讖言在魏境流行已久,上下咸闻。(虜を滅するは吳である。)との讖言が魏の地に流行して久しく、皆ことごとく聞いてゐる。

とある。ここで向燕南は『宋書』索虜伝の「虜中謠言、「滅虜者吳也。」の「謠言」を「讖言」としている。つまり、「謠言」を「讖」としている。

また、呂宗力「魏晋南北朝至隋禁毁讖緯始末」(『高敏先生八十華誕紀念文集』北京綫装書局二〇〇六年)の二四五頁に次のようにある。

所以太平真君五年令私弄沙門皆遣詣官曹,不完全是出于意识形态甚或政治原因,也可能掺杂有军事上动员人力的目的。至于禁讖,可能与太武帝对“灭虜吳也”谣讖之警觉心理有关,再加上其他涉及图讖的谋反事件的刺激。(したがって、太平真君五年(四四四)、私養の沙門に命じて軍隊に行かせたことは、単なるイデオロギー、或いは政治的な目的だけではなく、軍事上の人員動員という目的があつたのかもしれない。禁讖については、太武帝が「滅虜吳也」のデマに対する警戒心と、それに加えて、その他の讖緯による謀反からの刺激によるものかもしれない。)

とある。ここで呂宗力は「灭虜吳也」「淫讖」として「謠言」を「謠讖」としている。

以上のように、凶讖と謠言とは天命、天神の託宣・託言を背景とした時の政権への批判、変革の予言をするものがあり、この意味で同類のものである。次の節、「第三節 李弘の反乱」・「第四節 劉潔・蓋吳の反乱」において、具体的にその用例を考察して、北魏の廃仏との関係について論じてみたい。

### 第三節 李弘の反乱

先ずは、北魏における真君李弘の反乱と凶讖について述べてみたい。

『晋書』卷五十八周礼伝に、

時有道士李脱者。妖術惑衆。自言八百歳、故号李八百。自中州至建鄴、以鬼道療病。又署人官位。時人多信事之。弟子李弘、養徒瀟山云。应讖当王。(時に道士、李脱なる者あり。妖術にて衆を惑わす。自ら八百歳と言ひ、故に李八百と号す。中州より建鄴に至り、鬼道を以て病を療す。又た人を官位に署す。時の人、多いに信じて之れに事ふ。弟子の李弘、徒を瀟山に養ひて云ふ。讖に应じて当に王たるべし。)

とある、更に、『魏書』卷五十一封勅文伝に、

仇池城民李洪、自称応王。天授玉璽、擅作符書、誑惑百姓。(仇池の城民、李洪、自ら称してまさに王たるべし。天に玉璽を授けられ、擅に符書を作り、百姓を誑惑す。)

とある。このように李弘は、道士、李脱の弟子であり、「讖に应じて当に王たるべし」として、「自ら称してまさに王たるべし」とした人物である。<sup>(33)</sup>この李弘に関して、先行研究に、砂山稔「李弘から寇謙之へ——西暦四・五世紀における宗教的反乱と国家宗教——」(集刊東洋学第二十六・一九七一年〈昭和四十六〉)がある。『晋書』、『魏書』の李弘



について、同論文の四頁に次のようである。

(結論としては) 三つある。最初は、「李弘識に依じてまさに王たるべし」という図識が、東晋初に製作され、それが、巴蜀から、中原、山東地方まで、華北全土に渡って流行していたことである。二番目は、李弘を名のり、また、それを支持したものの中には、当時の支配階級から抑圧を被っていたと思われるものが多く存在したことである。最後は、これらの李弘の反乱の中には、数千家を包摂し、万余人を結集する大規模な反乱に達したものがあり、当時の支配階級に大きな打撃を与え得たことである。

とある。更に、同論文の十六頁に、

この「真君李弘」の存在は、容易に現実の統治者である皇帝の存在に取ってかわられる側面を有していたのである。寇謙之は、当時、広く民衆の間に流行していた真君思想のこのメカニズムを利用して、北魏皇帝を北方太平真君として奉戴することによって、真君思想のもとに結集されつつあった、人民の反体制的エネルギーを、北魏国家維持のエネルギーに転化させようとした。北魏皇帝を北方太平真君とよび、自らがその補佐に当たるとしたのは、彼のこのような意図に出づるものであった。

とある。砂山稔氏は寇謙之(三六五〜四四八)の意図、発案で太武帝に対して、北魏皇帝を北方太平真君として、真君李弘の「識に依じて当に王たるべし」との図識を利用して、太武帝に進言した旨を述べている。しかし、寇謙之の図識観を考察してみると、崔浩と寇謙之との関係を考慮しなければならぬ。寇謙之の図識観は崔浩の図識観を踏まえたものである。この崔浩の図識についての考えは、「図識は、虚、妄語の類としてこれを否定し」ている。つまり、砂山稔氏の説のような寇謙之の意図、発案というのではなくて、崔浩が寇謙之の後ろ盾となつて考案されたものを寇謙之は太武帝に進言したのである。このような経緯の真君李弘の図識による反乱をいずれにせよ太武帝は利用をした。つまり、真君李弘の件から太武帝は帝権の確立の為に図識を利用した事実があり、このことから、図識の禁絶をしたとは考えられない。<sup>35)</sup>

## 第四節 劉潔・蓋呉の反乱

次に、劉潔・蓋呉の反乱と図讖について述べてみたい。

北魏太武帝は太平真君五年（四四四）正月に廢仏と図讖禁絶とを行ったが、その前に臣下の劉潔が「劉氏應王。（劉氏應に王たるべし）」の図讖による反乱の動きがあった。『魏書』卷二十八列伝第十六劉潔伝に、

世祖之征也、潔私謂親人曰。「若軍出無功、車駕返者、吾当立樂平王」。潔又使右丞張嵩求圖讖、問。「劉氏應王、繼国家后、我審有姓名否？」嵩対曰、「有姓而無名」。窮治款引、搜嵩家、果得讖。潔與南康公狄隣及嵩等、皆夷三族、死者百余人。（世祖の征に、潔、私に親人に謂いて曰はく。「若し軍出でて功無く、車駕返えれば、吾れ當に樂平王を立つべし」。潔又右丞の張嵩をして図讖を求めしめ、問ふ。「劉氏應に王たるべし、国家の后を繼ぐ、我の、審かに姓名あるや否や?」。嵩対へて曰はく。「姓有りて名無し」。窮め治めて款（ねんごろに）引きて、嵩家を搜し、果して讖を得。潔と南康公の狄隣、及び嵩、等、皆、夷の三族、死者百余人。）

とある。この劉潔については先行研究に、向燕南「北魏太武帝灭佛原因考辨」（《北京师范大学学报（社会科学版）》一九九四年第二期）がある。同論文の五五頁の「二、太武第一次灭佛原因考」に、『魏書』劉潔伝・『魏書』樂平王不伝・『魏書』樂安王范伝を引用して、更に、『魏書』世祖紀、蠕蠕伝、劉潔伝を考慮すると、太平真君四年九月から十二月までに、劉潔、拓跋不等の謀反が行われたとしている<sup>(36)</sup>。そして、この劉潔、拓跋不等の謀反と図讖とは関係があり、図讖と僧侶との関係もあるとして、太武帝の図讖禁絶と廢仏が行われたとした。しかし、この向燕南の説には問題がある<sup>(37)</sup>。何故ならば、「①『魏書』世祖紀、蠕蠕伝、及び劉潔伝に明確に太平真君四年九月から十二月にかけて、劉潔等の謀反があったとは記されていない。②向燕南の「北魏太武帝灭佛原因考辨」（《北京师范大学学报（社会科学版）》一九九四年第二期）の論文に於いて、『魏書』世祖紀、蠕蠕伝、及び劉潔伝に於ける劉潔等の謀反の時期が太平真君四年九月から十二月に至るとした論理的論証がなされていない。③『魏書』蠕蠕伝の引用が全く無く、注記も全く

無い。これでは「太平真君四年九月から十二月に劉潔等の謀反があった」とする論証のしようがない。」のこの①、②、③の理由により、向燕南の見解は成立しない。従って、向燕南の見解を根拠に太平真君五年（四四四）正月の凶讖禁絶と廢仏が行われたとすることはできない。更に、劉潔、拓跋不等の謀反と凶讖について、太武帝自身が如何に考えていたのかの資料的根拠も向燕南は同論文で明確にしていない。<sup>(38)</sup>

劉潔は生没年不詳ではあるが、『魏書』卷四世祖紀の太延五年（四三九）秋七月の記述に劉潔の名がある。そこで、太武帝にとっては、劉潔の「劉氏應王。（劉氏應に王たるべし）」の凶讖による反乱の動きは、太平真君五年（四四四）の凶讖禁絶と廢仏に少なからず影響があったとは考えられるが、この劉潔の件が主な原因で北魏太武帝が凶讖禁絶を行ったとすることはできない。<sup>(39)</sup> 何故ならば、北魏太武帝の凶讖禁絶については拙稿では次のように考えるからである。拙稿では、太平真君五年（四四四）の凶讖禁絶と廢仏は、劉潔よりも蓋呉の反乱が大きく関連すると考えている。<sup>(40)</sup> 『宋書』索虜伝に、

先是、虜中謠言、「滅虜者呉也。」。燾甚惡之。二十三年、北地瀘水人蓋呉、年二十九、於杏城天台拳兵反虜。諸戎夷普並響應、有衆十余万。燾聞呉反、惡其名、累遣軍擊之、輒敗。（これより先、虜中の謠言に、「虜を滅するは呉なり。」と。燾甚だこれを惡む。二十三年、北地瀘水の人、蓋呉、年二十九、杏城天台に於いて拳兵し虜に反す。諸もろの戎夷普ねく並んで響應し、衆十余万有り。燾、呉の反を聞き、其の名を惡み、軍を累遣してこれを撃ち、輒ち敗る。）

とある。「虜中謠言、「滅虜者呉也。」燾甚惡之。（虜中の謠言に、「虜を滅するは呉なり。」と。燾甚だこれを惡む。）」とある。武功を第一に考え、帝権の確立を何よりも望んでいた太武帝にとって、謠言を後ろ盾とした蓋呉の反乱は許すことができない。先の拙稿で北魏廢仏の時の蓋呉と凶讖と僧侶の関係について次のように述べた。<sup>(41)</sup>

太武帝は何故廢仏を行ったのであろうか。それは蓋呉の反乱を抑える為であるという基本的な理由は否定することはできない。しかし、ただ単に、蓋呉の反乱を抑える為に廢仏が行われたとすると、仏教を内包した寇謙之の

新天師道を尊信する道教君主であった太武帝は蓋呉と通謀していたと思われる長安の一寺院は壊滅させて然るべきではあるが、北魏全土にわたって蓋呉とは関係のない部分の仏教をも廃棄する完膚なき廢仏を行ったのは、太武帝の道教信仰からして不可解となり理解のできないことになる。寇謙之の新天師道を尊信する道教君主である太武帝は、基本的には寇謙之のいやがる完膚なき廢仏をしたくないのである。それにもかかわらず、それでは、何故、太武帝は北魏全土にわたっての完膚なき廢仏を行ったのであろうか。それは、「滅虜者呉也（虜（魏）を滅ぼすものは呉なり）」の図讖に類する謠言を後ろ楯とした蓋呉の反乱を完膚なきまでに鎮圧除去する為である。つまり、当時の北魏社会における「謠言—図讖—僧侶—佛教」の密接な連関は動かし難いものであり、「滅虜者呉也（虜（魏）を滅ぼすものは呉なり）」という図讖に類する謠言を完璧に禁絶する為には完膚なき廢仏をしなければならぬ必要がある。従って、北魏の廢仏は、図讖禁絶が「主」で廢仏が「従」の關係の上に廢仏が行われたのである。とした。つまり、北魏太武帝の廢仏は図讖禁絶と密接な関連があり、長安の一寺院だけでなく北魏全土における廢仏を挙げしたのは、太武帝の帝権の確立の為に図讖（謠言）を抹消しなければならぬその必要性があったのである。

## 第五節 結

上記の考察をまとめると次のようになる。

前漢中・末期より後漢にかけて緯書が流行した。<sup>⑫</sup>この緯書は図讖・謠言と同類のものである。本拙稿においては、安居香山先生と同様に謠言を含む緯書、讖記、等の総称として図讖の語を用いた。<sup>⑬</sup>この謠言を含む図讖は、天命、天神の託宣・託言としての後ろ盾を有し、その必然的な効用を発揮するべくのものであり、王朝交代の革命思想と結び

ついた予言を主なその内容としている為に、西晋の頃より隋の煬帝に至るまでに、何度か、為政者の禁圧、禁絶が行われている。<sup>44)</sup>

北魏の時代においても凶讖禁絶は行われた。北魏の太武帝は、武功を第一に考え、禍乱平定を目標に帝権の確立を目指していた。<sup>45)</sup> 太武帝にとっては、その目的を達成させる為の儒教・仏教・道教であった。<sup>46)</sup> つまり、凶讖禁絶を行ったのも、廃仏を行ったのも、道教君主となったのもこの為である。<sup>47)</sup> このような北魏の太武帝にとっては、北魏政権を転覆させる可能性を持つ謠言を後ろ盾とした蓋呉の反乱が、長安の一寺院と蓋呉の結びつきがあることを太武帝が認識をしたこと<sup>48)</sup>を契機に、長安の一寺院の僧侶、仏教、蓋呉の謠言、凶讖、との相互関連を持つ全体像を一掃すべく、廃仏と凶讖禁絶とを同時期に断行する状況を生み出す結果となった。<sup>49)</sup>

本拙稿においては、北魏において廃仏を行った太武帝自身には、どのような状況下にあつて凶讖に対応していたのかを主眼として考察をした。つまり、この北魏の太武帝の廃仏と凶讖禁絶の断行以前に、既に、真君李弘の凶讖による反乱や劉潔の凶讖による反乱があつた。これ等により、北魏の太武帝にとっては、奇しくも、武功を第一、帝権の確立の為の、この凶讖の影響力について、充分に知り得る好機が既にあつたことを意味している。<sup>50)</sup> つまり、太武帝は為政者としての自らの帝権の確立の為に、天命としての凶讖をある時には利用し、<sup>51)</sup>ある時にはその帝権の確立を阻害する存在としての諸刃の剣の性格を有する凶讖の存在の認識を既に充分に持つており、その為に、同類の厄介な謠言を完膚なきまでに抹消すべく、蓋呉、長安の一寺院、僧侶、仏教、謠言、凶讖の全体像を一掃せねばならず、<sup>52)</sup>凶讖禁絶と寇謙之の嫌がる全面的な廃仏とを同時期に断行しなければならなかつたのである。<sup>53)</sup> このことは長安の一寺院と蓋呉と謠言の連関の要素がなければ全面的な完膚なきまでの廃仏や凶讖禁絶は行われなかつたことを意味している。

従つて、従来、日本における定論、定説となつている「廃仏の中心人物は崔浩である」<sup>54)</sup>ではない。「廃仏の中心人物は太武帝自身である」<sup>55)</sup>である。

## 註

- (1) 『塚本博士頌壽記念佛教史學論集』智新堂書店 一九六一年〈昭和三十六〉が初出である。尚、本拙稿における緯書、謠言、凶讖についての見解は、恩師安居香山先生の見解を基本的に踏襲しており、その域を出るものではない。しかし、北魏太武帝の廢仏に関して、筆者が凶讖禁絶と関連付けて考察することにより、従来の説とは全く異なる説を提示し、北魏太武帝の廢仏についての矛盾のない正確な説を導き出し得たことは、中国仏教史上の未解決の問題を解決したことになり、そこに意義、価値があると考えている。安居香山先生の研究の一展開としての成果に相当するものが拙稿である。
- (2) 『資治通鑑』卷百二十四、宋紀六、文帝元嘉二十一年（四四四）、参照。
- (3) 「北魏の凶讖禁絶―特に太武帝時について―」（『大正大学研究紀要』第九十二号 二〇〇七年〈平成十九〉）。「北魏法難の実態解明について」（『大正大学研究紀要』第九十四輯 二〇〇九年〈平成二十一〉）。「中国に於ける北魏法難の研究について」（『大正大学研究紀要』第九十五輯 二〇一〇年〈平成二十二〉）。「日本に於ける北魏法難の研究について―先考研究について―」（『宇高良哲先生古稀記念論文集「歴史と仏教」(文化書院) 二〇一二年〈平成二十四〉）。「北魏廢仏の説について―蓋呉と凶讖と僧侶の関係―」（『小此木輝之先生古稀記念論文集 歴史と文化』青史出版 二〇一六年〈平成二十八〉）。「太平真君五年正月以前の蓋呉の反乱について」（『大正大学研究紀要』第一〇三号 二〇一八〈平成三十〉）。「魏書」積老志における北魏の廢仏について」（『大正大学研究紀要』第一〇四号 二〇一九〈平成三十一〉）等、参照。尚、従来、北魏太武帝の廢仏事件に関しての論考は日本における塚本善隆先生に代表される仏教史の資料からアプローチによる研究と、中国において、正史をもとにした研究とがあるが、双方とも、寇謙之の道教の性格や凶讖についての十分な認識を経た上での論考ではない。筆者の諸拙稿はこれ等の欠を補い考察をした。そして、従来の説とは全く異なる説を提示した。諸拙稿により北魏太武帝の廢仏についての正確な説を出し得たことの意義は、中国仏教史上の未解決の問題を解決し

たことになる。これまでに、三武二宗の法難については、第一番目の北魏の廢仏についての詳細な考察を拙稿が行い、北周武帝の廢仏に関しては、野村耀昌著『周武法難の研究』（東出版 一九六八年〈昭和四十三〉）がある。今後、唐武宗、後周世宗の廢仏についての詳細な研究がなされることを望む。

(4) 先の拙稿に、「研究ノート「北魏廢仏の時に於ける図讖の存在」」（六朝學術学会）〈学会HP 上の「●HP会員研究ノート」〉（令和2年6月30日受付 同7月2日掲載 掲載期間2021年3月31日まで）があった。本拙稿は、この研究ノートの成稿に相当する。

(5) 蔣清翊編『緯字源流興廢考』（蔣氏雙唐碑館刊本景印 研文出版 一九七八年〈昭和五十三〉）、安居香山・中村璋八著『緯書の基礎的研究』国書刊行会 一九七六年〈昭和五十一〉、拙稿「寇謙之と図讖」（『牧尾良海博士喜寿記念儒佛道三教思想論攷』山喜房 一九九一年〈平成三〉）、参照。

(6) 『後漢書』光武帝紀、参照。

(7) 『宋書』符瑞志、参照。

(8) 『宋書』符瑞志、参照。

(9) 『後漢書』光武帝紀、参照。

(10) 安居香山「図讖の形成とその延用——光武革命前後を中心として——」（安居香山・中村璋八著『緯書の基礎的研究』国書刊行会 一九七六年〈昭和五十一〉）の第一篇第二章）、参照。

(11) 『後漢書』卷七十九下儒林列伝第六十九下薛漢伝、参照。

(12) 『後漢書』光武帝紀、参照。

(13) 『後漢書』卷三十二樊宏陰陽列伝第二十二、参照。

(14) 『後漢書』方術伝序に、「習為内学。（習ひて内学と為す。）」の注に「内学謂図讖之書也。其事秘密故称内。（内学は図讖の書を謂ふなり。其の事、秘密の故に内と称す。）」とある。更に、『欽定四庫全書提要六按語』に、「図

識之類謂之内学。(図識の類は、これを内学と謂ふ。）」とある。

(15) 註(13)、参照。

(16) 『晋書』武帝紀、参照。

(17) 『晋書』石季龍上、参照。

(18) 『晋書』苻堅上、参照。

(19) 本拙稿「はじめに」の『魏書』世祖紀、参照。

(20) 『隋書』経籍志一、参照。

(21) 『魏書』高祖紀、参照。

(22) 安居香山著『中国神秘思想の日本への展開』(大正大学選書5)の一九八頁に、「斉でも永明三年(四八五)に同様な処置が取られている。」とあるが、史書に於いて筆者未見。

(23) 註(20)参照。

(24) 『隋書』高祖紀、参照。

(25) 『隋書』経籍志一、参照。

(26) 安居香山著『中国神秘思想の日本への展開』(大正大学選書五、大正大学出版部 一九八三年〈昭和五十八〉)の一九六頁、参照。

(27) 蔣清翊編『緯学源流興廢考』(蔣氏雙唐碑館刊本景印 研文出版 一九七八年〈昭和五十三〉)二十「燔禁」、安居香山著『中国神秘思想の日本への展開』(大正大学選書五、大正大学出版部 一九八三年〈昭和五十八〉)「七

3 「緯書」の禁圧と流伝」一九六頁、安居香山著『緯書と中国の神秘思想』(平川出版社 一九八八年)「第一章

漢代思想の流れと緯書 4 新儒学の形成◎緯書流行への抵抗」五五頁、参照。

(28) 北魏太武帝は何故、廢仏を行ったのか、何故、図識禁絶を行ったのかのその根拠は武功を第一に考える太武帝の



考えによるものだと考える。従来の塚本善隆先生の説による崔浩が原因で廢仏が行われたとは考えられない。本  
拙稿、註(3)、参照。

(29) 註(21)、参照。このように北魏においては、太武帝も孝文帝も凶讖禁絶、禁断をしている。呂宗力、訳李雲・中村敏子「兩  
晋南北朝より隋に至る凶讖を禁絶する歴史の真相」(『中村璋八博士古稀記念東洋学論集』汲古書院、一九九六年(平成  
八)二五八頁に、北魏における太平真君五年(四四四)、太和九年(四八五)の二回の禁讖令について述べている。  
註(5)、参照。

(31) 申田久治著『中国古代の「謠」と「予言」』(創文社 一九九九年(平成十一)の二六頁、更に、註(5)、参照。

(32) 『宋書』索虜伝に、「先是、虜中謠言、「滅虜者呉也。」。燾甚惡之。二十三年、北地瀘水人蓋呉、年二十九、於杏  
城天台拳兵反虜、諸戎夷普並響應、有衆十余万。燾聞呉反、惡其名、累遣軍擊之、輒敗。(これより先、虜中の  
謠言に、「虜を滅するは呉なり。」と。燾甚だこれを惡む。二十三年、北地瀘水の人、蓋呉、年二十九、杏城天台  
に於いて拳兵し虜に反す、諸もろの戎夷普ねく並んで響應し、衆十余万有り。燾、呉の反を聞き、其の名を惡み、  
軍を累遣してこれを撃ち、輒ち敗る。」とある。

(33) 『晋書』卷五十八周礼伝に、「李弘」とあり、『魏書』卷五十一封勅文伝に、「李洪」とあるのは、砂山稔「李弘  
から寇謙之へ——西曆四・五世紀における宗教的反乱と国家宗教——」(『集刊東洋学第二六一一九七一年(昭和  
四十六)の三頁に、「李弘ではなく、李洪と記されるが、これは、恐らく、魏書で顯祖獻文帝の諱である「弘」  
を避けて、「洪」とした結果であると思われる。」とある。筆者は、更に、唐の皇太子(父は三代皇帝高宗、母は  
武照(武則天))に相当する人物に李弘(六五・一・六五二〜六七五)がいる。本来は「李弘」であるものを避諱を  
して「李洪」としたものと考える。砂山稔「李弘から寇謙之へ——西曆四・五世紀における宗教的反乱と国家宗  
教——」(『集刊東洋学』第二六一一九七一年(昭和四十六)の二頁に、拙稿「寇謙之と凶讖」(『牧尾良海博士喜寿記念  
儒佛道三教思想論攷』山喜房 一九九一年(平成三)の二頁に、参照。

(34) 拙稿「寇謙之と凶讖」(『牧尾良海博士喜寿記念儒佛道三教思想論攷』山喜房 一九九一年〈平成三〉)一三五頁、

「北魏太武帝と寇謙之」(『中国学研究』第十二号 一九九三年〈平成五〉)の註(11)、「崔浩の凶讖禁絶について」(『大

正大学総合仏教研究所年報』第八号 昭和六十一年)の六十二頁、参照。

(35) 註(34)、参照。

(36) 『魏書』卷二十八列伝第十六劉潔伝に「世祖之征也、潔私謂親人曰、「若軍出無功、車駕返者、吾当立樂平王。」

潔又使右丞張嵩求凶讖、問、「劉氏應王、繼国家后、我審有姓名否？」嵩対曰、「有姓而無名。」窮治款引、搜嵩

家、果得讖。潔與南康公狄隣及高等、皆夷三族、死者百余人。」(世祖の征に、潔、私に親人に謂いて曰はく、「若

し軍出でて功無く、車駕返えれば、吾れ当に樂平王を立つべし。」潔又右丞の張嵩をして凶讖を求めしむ、問う、

「劉氏應に王たるべし、国家の后を継ぐ、我の、審かに姓名あるや否や?」。嵩対へて曰く、「姓有りて名無し。」

窮め治めて款(ねんごろに)引きて、嵩家を搜し、果して讖を得。潔と南康公の狄隣、及び嵩、等、皆、夷の三

族、死者百余人。」とある。更に、『魏書』卷十六明元六王列伝第五樂平王不伝「樂平王不、少有才幹、為世所称。

太宗以不長、愛其器度、特優異之。……後坐劉潔事、以憂薨。事在潔伝。諡曰戾王。……不之薨及日者董道秀

之死也、高允遂著筮論曰「昔明元末起白臺、其高二十余丈、樂平王嘗夢登其上、四望無所見。王以問日者董道秀、

筮之曰『大吉。』王黙而有喜色。後事発、王遂憂死、而道秀棄市。……。」(樂平王の不、少くして才幹有り、世

の称する所と為る。太宗の不長するを以て、其の器度を愛する、特に優して之を異にす。……後に劉潔の事に坐

して、以て憂い薨す。事、潔伝に在り。諡して戾王と曰う。……。不の薨じて日に及び、董道秀、死す、高允

遂に筮論を著して曰はく「昔、明元の末、白臺起こる、其の高さ二十余丈、樂平王、嘗て夢に其上に登り、四望

して見る所無し。王、以て日を問う者、董道秀、之れを筮して曰はく『大吉。』王、黙して喜色有り。後事発す、

王遂に憂死し、而して道秀、市に棄つ。……。」とある。樂平王の不が薨じたのは太平真君五年(四四四)の二

月辛未である。更に、『魏書』卷十七明元六王列伝第五樂安王範伝「樂安王範、泰常七年封。……後劉潔之謀、

範圍而不告。事発、因疾暴薨。」(樂安王の範、泰常七年に封ず。……後の劉潔の謀、範圍きて告げず。事発して、疾に因りて暴薨ず。)とある。この三つの資料から太平真君五年(四四四)正月の太武帝の凶讖禁絶、廢仏が為されたとするのは、太武帝の明確な意志表示をした資料がない為に肯定ができない。

(37) 拙稿「北魏の二回の廢仏について——特に向燕南の説について——」(『廣川堯敏教授古稀記念論集』『浄土教と佛教』(山喜房佛書林)二〇一四年(平成二十六年)、参照。

(38) 註(37)、参照。

(39) 向燕南の論文とは別に、劉潔に関する先行研究に、呂宗力「魏晋南北朝至隋禁毀讖緯始末」(『高敏先生八十華誕紀念文集』北京綫裝書局二〇〇六年)がある。同論文の二四五頁に、「也許不為過分(多分行き過ぎではない)。」として太武帝にとっては、劉潔の「劉氏應王。(劉氏應に王たるべし)」の凶讖による反乱の動きは、太平真君五年(四四四)の凶讖禁絶と廢仏に少なからず影響があつたと呂宗力も考えている。そして、この劉潔の件が主な原因で北魏太武帝が凶讖禁絶を行ったとも呂宗力も筆者と同様に考えていない。拙稿「太平真君五年正月以前の蓋呉の反乱について」(『大正大学研究紀要』第一〇三号 二〇一八(平成三十)、参照。

(40) 拙稿「北魏廢仏の説について——蓋呉と凶讖と僧侶の関係——」(『小此木輝之先生古稀記念論文集 歴史と文化』青史出版 二〇一六年(平成二十八)、参照。

(41) 註(40)の四一三頁、参照。

(42) 安居香山「緯書成立の研究」(『緯書の成立とその展開』国書刊行会昭和五十四年)、参照。

(43) 安居香山先生は論文「漢魏六朝時代に於ける凶讖と仏教——特に僧伝を中心として——」(安居香山・中村璋八著『緯書の基礎的研究』国書刊行会 一九七六年(昭和五十二)の二五九頁で、「この考察(漢魏六朝時代に於ける凶讖と仏教——特に僧伝を中心として——)に於いて、敢えて凶讖と言う」と述べている。本拙稿もこれに倣つた。

- (44) 註(27)、参照。
- (45) 註(34)、参照。
- (46) 註(34)、参照。
- (47) 註(34)、参照。
- (48) 『魏書』 魏老志の、「世祖即位、富於春秋。……容止者誅一門。」(世祖、即位して、春秋の富む。……容止する者は一門を誅す。)と。)の部分、参照。
- (49) 註(40)、参照。
- (50) 北魏の太武帝にとつて、凶讖は諸刃の刃である。自らの皇帝権の確立に役立てる為に利用しようとしたり、また、北魏の太武帝の治世にあつて、民族義起を興すその理論的後盾となる可能性を持つ存在が凶讖である。註(34)の拙稿、参照。
- (51) 砂山稔「李弘から寇謙之へ——西暦四・五世紀における宗教的反乱と国家宗教——」(集刊東洋学第二十六)、註(34)、参照。
- (52) 註(34)、参照。
- (53) 向燕南「北魏太武帝灭佛原因考辨」(《北京师范大学学报(社会科学版)》一九九四年第二期)の30頁に、二回目  
の廢仏について向燕南は、「第二次是一次激烈的灭佛运动、发生在太平真君七年(四四六年)。这次灭佛是在北魏  
境内民族矛盾十分尖锐并威胁到北魏统治的情况下发生的。原因是长安地区的僧侣卷人盖吴领导的反魏起义。(第  
二回目は一つの激烈な廢仏運動であり、太平真君七年(四四六年)に発生した。この廢仏は北魏内の民族矛盾が  
十分に尖鋭化したものであり、それに北魏の統治を脅かす状況の下に発生したものである。原因は長安地区の僧  
侶の蓋呉の指導に巻き込まれた魏に反する武装蜂起である。)」としている。更に、同論文五五頁の「二、太武  
第一次灭佛原因考」に、「造成当时一般人对于阴阳方术、图讳讖记、释子道徒往往无别、而统称为道术、道人。

……考灭佛前的史実、太武第一次灭佛与这些有着极密切的关系。(当時の一般の人は陰陽方術、凶緯讖記に対して、仏教徒・道教徒の別無く、統べて称して、道術、道人とした。……。廃仏前の史実を考えるに、太武帝の第一回目の廃仏とこれらとは極めて密接な関係がある。)」としている。

(54) 拙稿「寇謙之と凶讖」(『牧尾良海博士喜寿記念儒佛道三教思想論攷』山喜房 一九九一年(平成三))・「北魏太武帝と寇謙之」(『中国学研究』第十二号平成五年)、参照。

(55) 当拙稿、「第四節 劉潔・蓋呉の反乱」、参照。

(56) 塚本善隆「北魏太武帝の廃仏毀釈」(『支那仏教史学』一一四 一九七三年(昭和十二))四〇頁、参照。この説は従来 of 日本における定論、定説であり、日本の諸書、諸論文に散見できる。註(1)、註(3)、参照。

(57) 註(3)、参照。